

2018年9月3日

鹿児島県知事 三反園 訓 殿

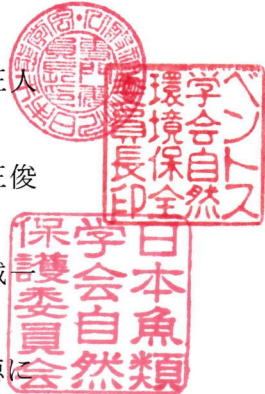
鹿児島県議会議員 柴立 鉄彦 殿

奄美大島嘉徳海岸の護岸建設の見直しを求める要望書

一般社団法人日本生態学会 自然保護専門委員会委員長 吉田 正人

日本ベントス学会 自然環境保全委員会委員長 松政 正俊

一般社団法人日本魚類学会 自然保護委員会委員長 森 誠



日本全国の砂浜が護岸によってその姿を損ねる中、鹿児島県大島郡瀬戸内町の嘉徳には、護岸のない、自然度の高い砂浜海岸が残されています。しかし、台風などによって砂浜海岸が侵食され、2014～2015年には嘉徳集落の一部に崩落の危機が迫り、鹿児島県大島支庁によって護岸建設が計画されました。一方、嘉徳海岸の自然度の高さや希少さを惜しむ人々の中から反対の声が上がり、大島支庁は計画を一時白紙に返して、検討委員会を立ち上げました。そして、2017年度の3回の検討委員会において侵食の原因、対策、環境影響について議論し、当初計画の護岸長を3分の1に減じ、護岸を砂で覆い、アダンなどの海浜植物の植栽を施すという新しい護岸建設計画を発表し、今年秋にも着工する予定と聞いています。

当初の護岸工事計画を、一旦白紙に戻し、検討委員会を立ち上げて再検討行ったことは高く評価できます。しかし、この検討の中で、最も根本的な砂浜の侵食の原因や、今後予測される砂浜の動態等については、科学的な検討が十分にはなされていないと考えます。例えば、沖合における海砂採取が砂浜侵食に与えた影響や、砂浜の自然回復に対する護岸建設の影響等を科学的に評価・予測しないまま、護岸建設を進めることには重大な瑕疵があると言わざるを得ません。

われわれ3学会は、以下の理由により、この新しい護岸建設計画も、鹿児島県が誇る、そして奄美の宝とも言える嘉徳海岸の貴重な自然を失う可能性が極めて高いことを危惧しています。そのため、現在計画されている護岸建設工事着工を見合わせ、この嘉徳海岸の砂浜を永続的に保護する方策を科学的に検討されるよう、下記の通り強く要望します。

記

奄美大島の南部、鹿児島県大島郡瀬戸内町の嘉徳海岸は、琉球列島の中では珍しい、サンゴ礁に縁取られていない、岩石由来の砂粒からなる「非サンゴ礁性」の砂浜を有する海岸の1つです(資料1参照)。日本の亜熱帯域における砂浜の多くはサンゴ礁性のものですが、嘉徳海岸の砂浜は、その西側に流入する自然河川の嘉徳川によってもたらされた砂が長い

年代にわたって蓄積したものです。こうした非サンゴ礁性の砂浜のうち、人工物のない自然海岸は、嘉徳海岸のほかには今では西表島にしか認められず、きわめて重要なものです。

護岸の全くない砂浜海岸は、日本列島全域を見てもきわめて稀になっており、そうした希少な砂浜の1つを有する嘉徳海岸は、すこぶる高く特色ある生物多様性を擁しています。この海岸は、アオウミガメ・アカウミガメ（いずれも、絶滅危惧 IB 類 (IUCN: 国際自然保護連合)、絶滅危惧 II 類 (環境省)) が産卵のために上陸することで知られ、2002 年には、オサガメ（絶滅危惧 IA 類 (IUCN)）の上陸も記録されています。オサガメは生きた化石とも言われ、厳重な保護が求められており、日本では嘉徳海岸以外での上陸は記録されていません。また、天然記念物のオカヤドカリ類が 3 種、豊富な個体群を維持しており、このことは、陸と海との連続性が良好に保たれていることを意味しています。この砂浜の生物多様性の高さは、これまでの砂浜の打ち上げ調査により約 430 種の貝類が報告されていることから窺えます。このうち絶滅が危惧されるレッドリスト記載種が 33 (環境省: 27、鹿児島県: 13、共通: 7) 種報告されており (資料 2 参照)、その中のタママキ類、ナミノコガイ類などの二枚貝類は、非サンゴ礁性の砂浜の指標種であり、このような環境は現在の奄美・沖縄地域では、嘉徳海岸にしか残されていません。

嘉徳海岸には、自然林の中を流れ下る嘉徳川が注いでいます。この嘉徳川には、沖縄で絶滅したリュウキュウアユが健全な個体群を維持しており、河口付近には、絶滅危惧種を含む汽水性貝類が豊富です。このように嘉徳には、琉球列島には数少ない非サンゴ礁性の砂浜の生態系が奇跡的に手つかずで残されており、その自然は、海と陸との連続性と、海と川との連続性がともに良好に保たれている場所として、きわめて価値が高いと言えます。

このように我々は、嘉徳海岸が、日本の亜熱帯域では数少ない非サンゴ礁性砂浜を有する場として、海と陸・海と川との連続性が良好に保たれたエコトーンとして、護岸のない手つかずの砂浜を有する海岸として、そして、多くの絶滅危惧種を擁する極めて多様性の高い場所として、かけがえない貴重な自然海岸であるという認識に立って、以下のように要望します。

1. 嘉徳海岸の砂浜侵食の原因を科学的に検証し、砂浜を含む嘉徳海岸の貴重な生態系が未来に残されるために真に有効な解決策を策定すること。
2. 有効な解決策を実施する場合においても、その実施前に生物調査を行い、嘉徳海岸の生物多様性と生態系への影響を科学的に予測するとともに、監視委員会を設け、実施中・事後も環境調査を継続して結果を公表し、必要な場合は環境・生態系保全のための対策を講ずること。

豊かな自然が残り、いくつもの絶滅危惧種が生息し、その場所の重要性が様々に指摘されている嘉徳海岸では、厳に護岸建設を避けるべきであり、科学的なデータに基づく原因の追及と対策を考える検討委員会を再び立ち上げて、現計画の見直しを行い、貴重な自然と景観を未来の世代に残せるよう、計画の再考を強く要望します。

以上

資料 1: 「沖縄・奄美大島の砂浜を構成する砂粒の粒度および組成」 (沖縄国際大学・山川彩子ら)

資料 2: 「嘉徳海岸で確認された貝類のレッドリスト掲載種」 (貝類多様性研究所・山下博由)